

西田幾多郎旧住居と、その一部保全

—京都学派形成と悲哀の哲学の現場—

概要

哲学者西田幾多郎と、その家族が、大正元年から大正11年まで住んだ家が来る6月8日に取り壊される。西田がこの家に住んだ時期は、西田が最も哲学の研究に没頭した時期であり、また、京都学派が形成され、西田と京大文学部哲学科の名声が飛躍的に高まった時期でもある。そして、それは何より西田の生涯で最も苦しい時期であった。跡取り息子の次男外彦氏によれば、この家は、「誠に複雑ないろいろな事が起きた家」であり、西田にとってもその家族にとっても「最も思い出の詰まった家」なのである。実際、この家に関連して多くのエピソードが親族や弟子などにより記録されている。

そのため、この家屋を歴史的文化財と考える研究者や建築関係者のチームにより、その一部解体保存が行われる。散歩をしながら考えたことで有名な西田だが、この時期には、まだ晩年の散歩の習慣はなく、思索に詰まると、この家の二階外廊下（縁側）を往復しながら哲学と格闘するように思考した。弟子三宅剛一によれば、その様には、「凄恰といったようなものがあり」、「檻の中を歩くライオンを聯想」させたという。いわば「哲学の廊下」である。保存されるのは、この外廊下と書斎の一部であり、保存先は、京大総合博物館であるが、解体作業チームを率いる福井工業大学市川秀和教授の私邸にも保存される。

保存・解体の本作業は西田の命日の翌日にあたる6月8日に実施されるが、予備調査を5月28日に実施する。この予備調査の様子を公開するとともに、現地において、この家の文化財的価値や、廊下・書斎の保存の他に実施した調査・記録の説明を行う。この調査・記録には、

1. グーグル・ストリートビューや類似の360度パノラマ写真による建物の内部などの記録
2. 建築の専門家による建物の調査
3. 親族・弟子などによる手記や写真などの史料による西田在住のころからの保全度の調査
4. この家に関する数々のエピソードや、この家を訪問した人々の調査

がある。これらについては、当日、資料を配布する予定。

1. 背景

西田幾多郎は何度も転居を繰り返したが、次男外彦氏（長男は若くして死去）が、「父の停年近く迄住んだ家で、父にとっても私にも最も思ひ出の多い家である」と書いた家が、6月8日に取り壊されることとなった家である。この家に在住した大正元年からの11年の間に、西田とその家族に多くのことが起きた。

同僚や学生などから、すでに高い評価を得ていた西田だが、世間的にも有名となり、また、京都学派が形成されたのは、案外に遅く、実は、この家に在住していた、西田の50歳代のことである。京都学派が形成されるのは、それまで三高の学生でも哲学を志すものは東京帝国大学に進学することが多かったところを、一高を主席で卒業した三木清が西田を慕って京都帝国大学哲学科に進学（大正6年）したころからである。この後、西田の後を継ぎ、西田とともに京都学派を形成した田辺元の助教授着任（大正8年）、西谷啓治、戸坂潤らが一高より進学する（大正10年）などして、京都学派が形成される。また、当時の流行作家倉田百三の『愛と認識の出發』の出版（大正10年）により、その中で西田が絶賛され、世間的にも有名となったといえる。

しかし、この時期は、西田の後期哲学で、もっとも独創的とされる「場所の論理」に辿り付く直前であり、「善の研究」の立場から脱するために最も哲学と格闘していた時期にあたる。その苦闘の様子は、次男外彦氏や弟子たち、晩年の西田の柔和な印象とは違う、強く熾烈な印象を残した。

後には、一般雑誌ためにも原稿を書いた西田だが、このころには、雑誌への寄稿を毛虫の様に嫌って、おり原稿の依頼に来た記者に「帰れ、帰れ」と怒鳴りつける声が書斎から聞こえたこともあるという。一方で、改造社社長の山本実彦が雑誌『改造』への寄稿の依頼に、この家に訪れた際には、珍しく機嫌よく引き受けてもいる。(ちなみに、この家を訪れた哲学者以外の著名人としては、山本の他、近衛文麿、柳宗悦、西田天香、三井財閥10代、11代当主の三井高棟・高公親子などがいる。特に近衛は京大在学中には頻繁に訪れていたらしい。)

また、大正8年から11年の4年間に、西田とその家族は毎年、大きな災いを経験した。大正8年に夫人が脳溢血(7年後の死去まで寝たきり)、9年に長男が急死、10、11年に娘三人が次々と病に倒れたのである。特に長男謙氏の突然の死は、西田を深い悲しみの淵に落とした。

後年、西田は、西欧で言われるように「哲学は驚きの念から始まる」のではなく、それは「深い悲哀の念から始まるべきだ」とした。この悲哀の哲学の大きな源が、この家における数々の苦難にあったのは確かだろう。

2. 今後の予定

今回、公開する予備調査と、6月8日の本解体は、西田の後の居宅の保全にも関わった福井工業大学市川秀和教授(建築史)の指揮の元に、福井県越前市のM工房の一級建築士村上周作氏などにより実施され、廊下の床板、手摺などが京大総合博物館に保管される。また、それ以外の部材の一部などが市川教授により私的に保管される。

また、撮影された360度パノラマ写真は、市川教授が作成した図面などの調査結果とともに、林教授が主催する京都学派アーカイブで、展示するとともに、グーグル・ストリートビューで、文化財の写真として公開される。これにより、西田が歩いた廊下をグーグル・ストリートビューで歩きまわる経験ができるようになる。これは家屋の所有者のプライバシーなどを考慮して、少し時間を置き、報道も行われた後に掲示する予定である。

また、今後、資金調達などを行った上で、保管された部材や、記録などを使い、西田幾多郎の「哲学の現場」を、広く一般に親しんでいただくための展覧会を行うことを考えている。

図 1：西田旧宅外観



図 2：内部のパノラマ写真（西田思索の場所：書斎と二階外廊下、家屋の後ろに大文字が見える）

